

生活技術の遂行状況の観点によるキャンプにおける野外炊事分析

白木 賢信¹⁾

An analysis of program activities on eating in organized camp for youth from the viewpoint of state of performance of living skills

Takanobu SHIRAKI¹

The purpose of this paper was to make clear state of performance of living skills in program activities on eating in organized camp. In this paper, the activities were analyzed by the framework of analysis for living skill learning. The data for this analysis collected in an example of 8-days organized camp for youth in Shizuoka prefecture. The subjects involved 62 youth ranged 10 to 18 years old. The result were as follows, 1)the state if performance of skills to prepare was low, 2)the state of performance of way of using firewood was fall. The results suggested that the state of performance of living skills must be taken into consideration in camp program.

Key word: organized camp, state of performance of living skills, living skills learning, youth education

1. 目的

本論文は、生活技術の遂行状況の観点からキャンプにおける野外炊事を分析することにより、キャンプにおける生活技術習得の一端を明らかにしようとするものである。これは、青少年の野外教育における生活技術習得の特徴を明らかにしようとする研究の一環をなすものである。

我が国の青少年の野外教育研究では、これまでに、野外教育に参加する青少年の意識的側面に関する効果の他に、生活技術習得にかかわる効果も一部取り上げられてきた¹⁾。生活技術を習得することは、例えば第15期中央教育審議会第一次答申でいわれたような「生きる力」²⁾を育成する上でも重要であると思われる。なぜならば、「生きる力」にはさまざまな側面があるが、生活をするための技術もその一側面であり、生活技術を習得すること

は、現代の青少年にとって今後重要性を持つと考えられるからである。したがって今後は、生活技術習得にかかわる未着手の研究に取り組む必要もあると思われるが、その場合、生活技術習得活動が青少年の野外教育でどのように行われ、またその活動の成果としてどのような生活技術が習得されたのかというような、青少年の野外教育における生活技術習得の特徴を解明する必要がある。

上述の特徴解明のためには、(1)生活技術習得活動が青少年の野外教育でどのように行われているのかを明らかにする、(2)青少年の野外教育でどのような生活技術が習得されたのかを明らかにする、という分析課題が考えられるが、そのための枠組も同時に必要である³⁾。(1)については、これまでに、青少年の野外教育では生活技術習得活動のどのような領域にウエイトがかけられているかを分析するための枠組を提出し、その有効性についての検討

1) 筑波大学大学院博士課程教育学研究科
〒305-8572 つくば市天王台1-1-1

1 Doctoral Program in Education, University of Tsukuba
1-1-1 Tennoudai, Tsukuba, Ibaraki (305-8572)

を行ってきた¹⁾。しかし、(2)の検討は、まだほとんど行ってきていない²⁾。そこで、本論文では、その第一段階として、生活技術の行使がどの程度うまくなしとげられているかということ（ここでは、それを生活技術の遂行状況と呼ぶ）を取り上げ、それが生活技術の種類別にみた場合どのようになっているのかを生活技術習得枠組を用いて明らかにすることにした。

なお、本論文では、生活技術の遂行状況にかかわる問題の範囲を野外教育の一形態である組織キャンプ（以下、キャンプとする）に限定し、キャンプで実施される野外炊事を事例に検討を行うことにした。ここでいう野外炊事とは、そのキャンプで行われる食事にかかわる一連の活動のことである。

2. 研究方法

2.1. 分析枠組と分析方法

上述の目的を達成するために、今回は生活技術習得枠組を用いた分析を行うことにした。上述の枠組の作成にあたっては、技術にはさまざまなとらえ方があるので、生活技術をどのようにとらえるかがまず問題となるであろう³⁾。本論文では、技術を一定の目的に達するための行動の仕方とし、さらにその行動の仕方を一連の計画的な手続きとしている⁴⁾。したがって生活技術は、生活における一定の目的に達するための一連の計画的な手続きとなる。そのとらえ方をもとにして、野外炊事にかかわる生活技術（米の炊事の場合）を図-1. のようにとらえることにした⁵⁾。野外炊事にかかわる作業を個人で行うか集団で行うかに

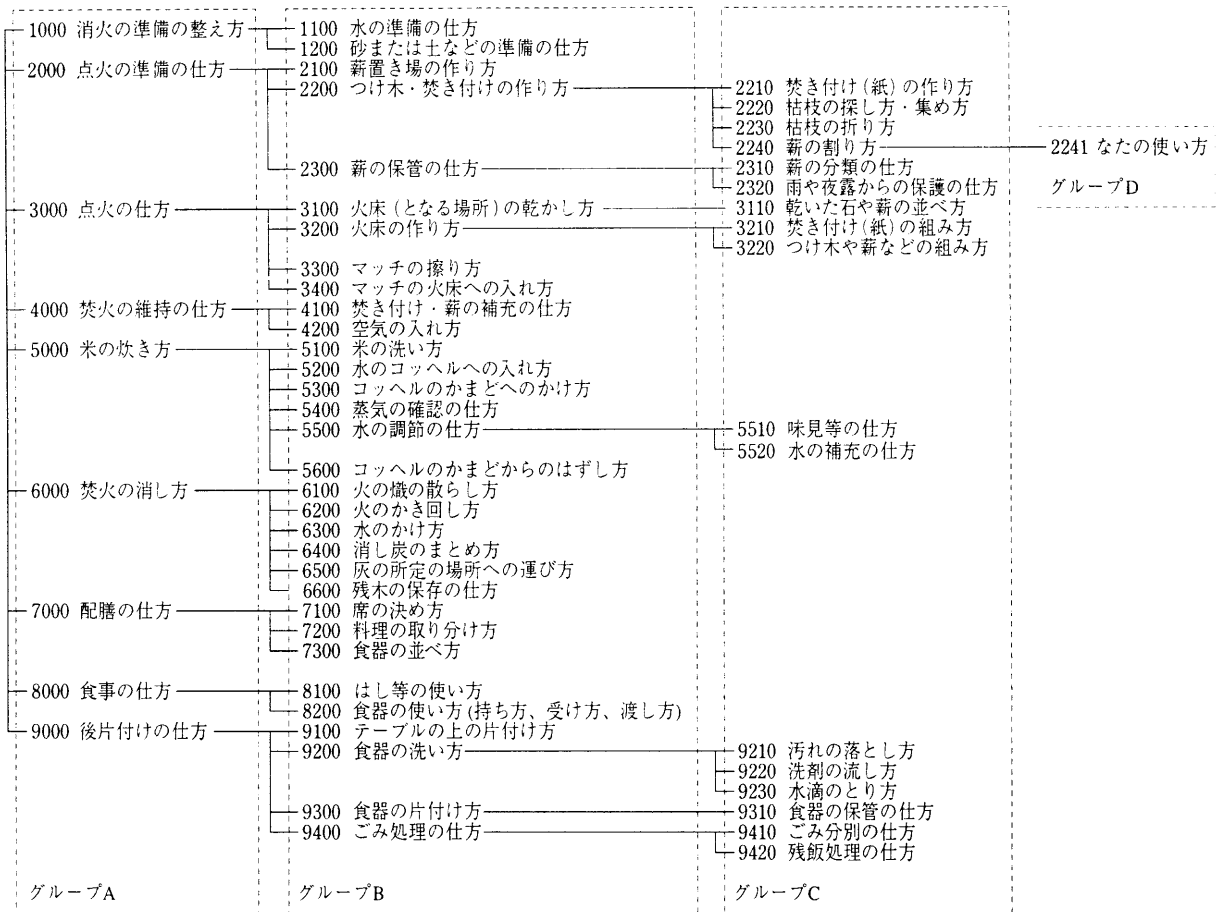


図-1. 野外炊事にかかわる生活技術—米の炊事の場合—

もよるが、生活技術は図でいえば上から順に用いられていくと考えられる。なおグループ化は、分析の際、全体的な作業にかかわる生活技術、部分的な作業にかかわる生活技術を区別するためのものである。今回は生活技術をこの枠組でとらえ、グループA、B、Cごとに分析した。具体的には、野外炊事にかかわる活動で用いられる生活技術の遂行状況を分析した。

なお、今回の遂行状況は、第1回観察（以下、第1回）と第2回観察（以下、第2回）の平均であるが、具体的にはキャンプ指導者の担当班への観察による評価値を用いている⁹⁾。評価値は、「よくできた」を5点、「あまりできなかった」を1点とし、その間の評価は1点きざみで行う5段階評価によるものとした。

2.2. 観察データ収集の方法

キャンプにおける野外教育プログラムは、野外炊事、設営、撤収などのようなさまざまな自然体験活動から構成されている。今回は、そのうちの野外炊事（とくに米の炊事にかか

わる作業）に限定した分析を行うことにした。その理由は、野外炊事が単一のキャンプにあっても繰り返し実施される活動の一つであり、枠組の有効性を検討するためにも、まずこの活動を取り上げる必要があると考えられるからである。分析に用いたデータは、これまでに収集した観察データで、以下はその観察の概要である。

(1) 観察目的

キャンプでの生活技術習得の特徴、および生活技術習得上の問題点を明らかにする。

(2) 観察内容

キャンプ参加者（キャンパー）の食事にかかわる生活技術習得について、以下の観察を行う。

①生活技術の遂行状況

②生活技術の遂行状況の目標に対する到達度

③生活技術遂行の難易度

④生活技術遂行における指導者の援助の有無

表 - 1. 観察サンプルのキャンププログラム

月日	午前	午後	(夜)
8/16 (1日目)		入所式 班別活動 オリエンテーション	歓迎パーティー 選択プログラム①紹介
8/17 (2日目)	選択プログラム①	ハイク、草木染め、皮細工、アニマル トラッキング、川遊び、紙すき、ウッ ドクラフト、バードウォッチング、 MTB、楽器作り、立体地図作りなどか ら毎日1種目を選択する。	選択プログラム②紹介
8/18 (3日目)	選択プログラム②		選択プログラム③紹介
8/19 (4日目)	選択プログラム③		選択プログラム発表会 ハイク準備
8/20 (5日目)	ハイク 富士山麓山の村→大沢崩れ→富士山麓山の村(25km)		ソロ ¹⁰⁾ (選択制)
8/21 (6日目)	休養	料理博覧会準備	料理博覧会
8/22 (7日目)	班別活動	演芸会	持ちよりパーティー キャンプファイアー
8/23 (8日目)	後片付け 清掃、記念撮影	退所式	

⑤生活技術の遂行過程

(3) 観察対象

青少年を対象とする組織キャンプ

(4) 観察サンプル（事例となった観察の対象）

キャンプ指導者団体S主催のキャンプ（具体的なキャンププログラムは表-1.を参照）

期 間：1998年8月16日～23日（7泊8日）

場 所：静岡県立富士山麓山の村およびその周辺

参加者：62人（年齢：10～18歳、居住地域：静岡県）参加者は、男女学年混合の7班に分かれて活動した。

指導者：25人（そのうち全日程指導者は13人）参加者によって構成された各班には、1名の指導者（キャンプカウンセラー）が割り当てられた。

(5) 観察方法

指導者による参与観察法（観察者：指導者8人（キャンプカウンセラー7人、その他の指導者1人）、被観察者：参加者62人、観察場所：静岡県立富士山麓山の村）

観察者については、本観察サンプルと同タイプのキャンプの指導経験を過去に有する者を選定することによって、適切な評価を行うようにした。

なお、観察者は、前述の観察内容①～④の観察（以下、観察A）については、観察者7名が日時・観察班等の指示を受け、観察内容を指定の観察記録用紙に記録した。また、前述の観察内容⑤の観察（以下、観察B）では、観察者1名が任意に抽出された1班を観察し、その観察内容を指、補助機器としてビデオカメラを使用した。

(6) 観察時期

第1回：1998年8月17日（キャンプ2日目）、

第2回：1998年8月22日（キャンプ7日目）

(7) 観察記録用紙の回収状況

〈観察A〉回収数（回収率）：13（92.9%）、

有効回収数（有効回収率）：12（85.7%）

〈観察B〉回収数（回収率）：2（100%）、

有効回収数（有効回収率）：2（100%）

3. 研究結果

3.1. キャンプ全体を通しての生活技術の遂行状況

まず、生活技術全体の遂行状況についてであるが、その平均は3.40となっている（表-2.参照）。この値は、「ふつうであった」の3点と「どちらかといえばよくできた」の4点の間で、観察者は、全体的には標準または標準よりも若干高い遂行状況であると評価したといえる。グループ別にみると、グループA、B、Cの順で評価値が高くなっていることから、観察者は、全体的な作業にかかわる生活技術の遂行状況をより高く評価していると考えられる。

表-2. グループ別にみた生活技術の遂行状況

グループ	第1回平均	第2回平均	両者の平均
グループA	3.44	3.67	3.56
グループB	3.44	3.39	3.41
グループC	3.25	3.33	3.29
全 体	3.38	3.42	3.40

次に、各生活技術でみた場合、どのような生活技術の遂行状況が高く、どのような生活技術の遂行状況が低かったのかについて、今回は、生活技術を各グループごとに遂行状況の評価値の順に並べ、それらを四分位点による分割をした¹¹⁾。その結果は表-3.の通りである。

この分割によって、上位群に入る生活技術を遂行状況の高い生活技術、下位群に入る生活技術を遂行状況の低い生活技術ととらえることにした。ここでいう上位群は、遂行状況が第3四分位点より大きい生活技術群、つまり上位25%に入る生活技術群のことである。また、下位群は、遂行状況が第1四分位点未満の生活技術群、つまり下位25%に入る生活技術群のことである。

表-3. 各グループにおける生活技術—遂行状況の四分位点による分割—

	グループA	グループB		グループC
第3四分位点より大きく、最大値以下	9000(4.17) 8000(3.80)	3300(4.75) 5100(4.25) 9100(4.13)	5300(4.38) 3400(4.17) 9300(4.13)	9200(4.00)
第3四分位点上	5000(3.75) 6000(3.75)	2200(3.88) 5600(3.88)	5200(3.88) 9200(3.88)	3210(3.88) 3220(3.88) 9210(3.88) 9230(3.88) 9310(3.88)
第2四分位点より大きく、第3四分位点未満		6500(3.75) 6400(3.63) 6100(3.50)	8200(3.70) 8100(3.60) 6200(3.50)	5510(3.75) 2240(3.13)
第2四分位点(中央値)上	7000(3.70)			2210(3.50)
第1四分位点より大きく、第2四分位点未満	3000(3.67)	5400(3.38) 3200(3.33) 9400(3.25) 7300(3.17)	5500(3.38) 7200(3.25) 3100(3.17)	5520(3.25) 9420(3.25) 9410(3.13)
第1四分位点上	2000(3.50)	4200(3.13) 6600(3.13)		3110(2.50)
最小値以上、第1四分位点未満	4000(3.25) 1000(2.50)	4100(3.00) 2100(2.63) 6300(2.50) 1200(1.83)	7100(2.92) 2300(2.50) 1100(1.83)	2310(2.33) 2230(2.17) 2220(1.83) 2320(1.83)

※表中の数字は生活技術No.(図-1.参照)で、()内の数字は各生活技術の遂行状況の評価値の平均である。

表-3.のように、上位群に入る生活技術には、野外炊事後片付けの仕方にかかわる技術が多く挙げられる。その他、マッチの使用の仕方にかかわる技術も入っている。一方、下位群には野外炊事にかかわる一連の作業の最初の方に用いられるようないわゆる準備段階の技術が多く入っている。その他には、焚火の維持の仕方にかかわる技術なども挙げられている¹²⁾。

3.2. キャンプ前半と後半における生活技術の遂行状況の比較

キャンプ全体を通しての生活技術の遂行状況については前述の通りであるが、キャンプ前半と後半でみた場合、その遂行状況に違いはみられるのであろうか。ここでは、キャンプ前半の遂行状況を示すものとして第1回(キャンプ2日目)の遂行状況、キャンプ後半の遂行状況を示すものとして第2回(キャンプ7日目)の遂行状況を取り上げることにした。

まず、生活技術全体とグループ別にみると、表-2.で示されるように、全体の平均は第2回(3.42)が第1回(3.38)より若干高く、グループA、Cの平均についても、第2回の方が第1回

よりも高くなっているが、グループBでは逆に第1回の方が高くなっている。グループBでそのようなになっているのは、主に米の炊き方にかかわる技術の第2回遂行状況が低くなっていることが影響していると考えられる。第2回の野外炊事では、第1回に比べ品数が多く、また野外炊事後のプログラムのための準備もあったので、米の炊事のみには十分な時間を割くことができなかった。このようなキャンプ・プロ

グラムによる作業条件の違いが、上述の原因の一つになっているのではないと思われる。

次に、生活技術の種類別にみるとどのような特徴がみられるのであろうか。ここでは、3.1.の検討で上位群と下位群に入った生活技術にしぼって検討することにした¹³⁾。

表-4.は、表-3.で上位群に入った生活技術を取り出したものである。この中で、第1回よりも第2回の方が高いものは、すべて8000台、9000台に属する生活技術で、これらは野外炊事後片付けの仕方にかかわる技術といえる。逆に、第1回よりも第2回の方が低いものには、マッチの火床への入れ方、マッチの擦り方、米の洗い方、米を入れたコッヘルのかまどへのかけ方が挙げられている。

表-5.は下位群の生活技術であるが、3.1.でも述べたように、野外炊事にかかわる一連の作業の最初の方に用いられるような、いわゆる準備段階の技術が多く入っている。この準備段階の技術を第1回と第2回の比較でみると、第2回が高いものには、消火の準備の整え方、(消火用の)水の準備の仕方、(消火用の)砂または土などの準備の仕方、点火用

表-4. 第1回と第2回の遂行状況の比較—上位群の生活技術の場合—

生活技術No. (観察者数)	第1回平均	第2回平均	第1回平均と 第2回平均の比較
3300 (2)	5.00	4.50	↘ (-0.50)
3400 (3)	4.33	4.00	↘ (-0.33)
5100 (4)	4.75	3.75	↘ (-1.00)
5300 (4)	4.50	4.25	↘ (-0.25)
8000 (5)	3.40	4.20	↗ (+0.80)
9000 (3)	3.67	4.67	↗ (+1.00)
9100 (4)	4.00	4.25	↗ (+0.25)
9220 (4)	3.50	4.50	↗ (+1.00)
9300 (4)	4.00	4.25	↗ (+0.25)

※第1回平均と第2回平均の比較の欄の矢印は、以下のことを示す。

↗：第1回平均<第2回平均

↘：第1回平均>第2回平均

また、()内の数値は、(第2回平均-第1回平均)であることを示す。

表-5. 第1回と第2回の遂行状況の比較—下位群の生活技術の場合—

生活技術No. (観察者数)	第1回平均	第2回平均	第1回平均と 第2回平均の比較
1000 (4)	2.25	2.75	↗ (+0.50)
1100 (3)	1.67	2.00	↗ (+0.33)
1200 (3)	1.67	2.00	↗ (+0.33)
2220 (3)	1.67	2.00	↗ (+0.33)
2230 (3)	1.67	2.67	↗ (+2.00)
2100 (4)	2.75	2.50	↘ (-0.25)
2300 (3)	2.67	2.33	↘ (-0.34)
2310 (3)	2.33	2.33	→ (0)
2320 (3)	2.00	1.67	↘ (-0.33)
4000 (4)	3.25	3.25	→ (0)
4100 (4)	3.00	3.00	→ (0)
6300 (4)	2.75	2.25	↘ (-0.50)
7100 (6)	2.67	3.17	↗ (+0.50)

※第1回平均と第2回平均の比較の欄の矢印は、以下のことを示す。

↗：第1回平均<第2回平均

→：第1回平均=第2回平均

↘：第1回平均>第2回平均

また、()内の数値は、(第2回平均-第1回平均)であることを示す。

の枯枝の探し方・集め方、点火用の枯枝の折り方などがある。これに対し、第2回が低いものは、薪置き場の作り方、薪の保管の仕方、薪の(雨や夜露からの)保護の仕方などである。このように、第2回が高いものは、主に消火の準備の整え方にかかわる一連の技術と、点火用の枯枝の扱い方にかかわる技術で、第2回が低いものは、主に薪の扱い方にかかわる技術である。このことは、消火の準備の整え方や枯枝の扱いは、全体的にはうまくいっているとはいえないものの、キャンプ後半

の方がうまくいっていたことを示している。薪の扱いはその逆で、キャンプ後半の方がうまくいかなかったことになる。

3.3. 遂行状況と到達度の比較

生活技術遂行を評価する場合、上述のような遂行状況の評価の仕方以外にも、遂行状況の度合が観察者の設定した目標と比べた場合どのようなようであったかというような、生活技術の遂行状況の目標に対する到達度(以下、到達度とする)という評価の仕方も考えられる。この到達度の検討はすでに行っている¹⁴⁾、ここでは、それぞれの上位群・下位群に入る生活技術について比較してみると、それは表-6のようにまとめられる。

この表によると、各群において、遂行状況・到達度の両者にほとんど同じ生活技術が入っていることが分かるが、一方のみに入っているものもわずかながらある。上位群では、遂行状況の方で入っていて到達度には入っていないものに、点火時のマッチの擦り方、点火時のマッチの火床への入れ方、食事の仕方、食事後のテーブルの上の片付け方が挙げられる。これらは、遂行状況としては高かったのにもかかわらず、到達度としてはそれほどでもなかったということになるので、指導者の目標値としてはかなり高いところに設定されていたことが推測される。また、遂行状況には入っていないものの、到達度には入っているものは、遂行状況はとくに高くなかったが到達度は高いということである。つまり、それは、指導者の目標値としてはそれほど高いものではないもので、具体的には、米の炊き方、水のコッヘルへの入れ方、味見等の仕方、焚火方に設定されていると推測されるものである。その他、この下位群にかかわるものには、遂行状況には入っていないが到達度には入っているものが考えられる。それは、指導者が設定した目標値が高かったと推測されるため、遂行状況としては目立って低くないのにもかかわらず、到達度としては低かったも

表-6. 上位群・下位群別にみた生活技術の遂行状況およびその到達度

	遂行状況	到達度
上位群	3300 (点火時の) マッチの擦り方	
	3400 (点火時の) マッチの火床への入れ方	
	5100 米の洗い方	5000 米の炊き方 5100 米の洗い方 5200 水のコッヘルへの入れ方
	5300 (米を入れた) コッヘルのかまどへのかけ方	5300 (米を入れた) コッヘルのかまどへのかけ方 5510 味見等の仕方 6200 (焚火の消火における) 火のかき直し方
	8000 食事の仕方	
	9000 (食事後の) 後片付けの仕方	9000 (食事後の) 後片付けの仕方
	9100 (食事後の) テーブルの上の片付け方	
	9220 (食器洗浄時の) 洗剤の流し方	9220 (食器洗浄時の) 洗剤の流し方
	9300 食器の (洗浄後の) 片付け方	9300 食器の (洗浄後の) 片付け方
	下位群	1000 消火の準備の整え方
1100 (消火用の) 水の準備の仕方		1100 (消火用の) 水の準備の仕方
1200 (消火用の) 砂または土などの準備の仕方		1200 (消火用の) 砂または土などの準備の仕方
2100 薪置き場の作り方		2100 薪置き場の作り方
2220 (点火用の) 枯枝の探し方・集め方		2220 (点火用の) 枯枝の探し方・集め方
2230 (点火用の) 枯枝の折り方		2230 (点火用の) 枯枝の折り方
2300 薪の保管の仕方		2300 薪の保管の仕方
2310 薪の分類の仕方		2310 薪の分類の仕方
2320 (薪の) 雨や夜露からの保護の仕方		2320 (薪の) 雨や夜露からの保護の仕方
4000 焚火の維持の仕方		4000 焚火の維持の仕方
4100 焚き付け・薪の補充の仕方		4100 焚き付け・薪の補充の仕方
6300 (焚火の消火時の) 水のかけ方		6300 (焚火の消火時の) 水のかけ方 6600 残木の保存の仕方
7100 (食事をする時の) 席の決め方		
		7300 (食事をするときの) 食器の並べ方

※表中の数字は生活技術No. (図-1. 参照) である。

のである。このようなものには、焚火を消す時の残木の保存の仕方、配膳をする時の食器の並べ方が挙げられる。

4. 考察

以上の結果から、今回観察を行ったキャンプに限ってみれば、まずキャンプ全体を通してみると、野外炊事にかかわる準備段階の生活技術の遂行状況が低いと考えられる。これは、キャンプにおける生活技術の遂行上の問題点の一つといえるものであろう。なぜならば、一連の作業における生活技術遂行では、遂行状況の低い部分ではできるだけない方が望ましいからである。これまでにも、生活技術習得に関する報告もなされてきているが、今回の研究結果にみられるような、あるひとまとまりの一連の作業にかかわる生活技術でどの部分の遂行状況が低いのかという点までは明らかにされていなかった¹⁵⁾。

それでは、その遂行状況が低い原因はどのようなところにあるのであろうか。低い原因としては、例えば次の2点が考えられるであろう。第1は、現在のキャンプ参加者側の特徴の一つとして、キャンプの準備段階にかかわる技術などが身に付いていないことである。第2は、キャンプ参加者側でできることやすべきであったことを指導者側で事前に準備してきていたことである。例えば野外炊事の場合、準備から後片付けまでの作業に要する時間は、1日の活動時間のかなりを占めている¹⁶⁾。そうになると、他の活動のための時間を十分に確保できなくなる可能性が生じるので、それを確保するために野外炊事にかかわる作業の時間を短縮することがあ

り、準備段階などの一部の作業を指導者側で進めておくことがある。このようなことは、今後のキャンプ・プログラムに関して、検討しなければならない課題の一つと考えられる。

次に、上述の準備段階の生活技術のうち、薪の扱い方にかかわる技術は、キャンプ後半の方が遂行状況が低い点で問題視すべきものであろう。3.2.で述べたように、グループ別の検討では、第2回の遂行状況の方が低いことは、米の炊き方にかかわる生活技術の遂行状況が低いことが影響していると考えられたが、その限りではどのくらいの遂行状況がどのくらいまで低くなったのかということは検討できない。しかし、上位群・下位群ごとに検討することによって、問題となっている生活技術はどれであるのかがよりはっきりとできるのである。ここでいう薪の扱い方にかかわる技術とは、薪置き場の作り方、薪の保管の仕方、薪の (雨や夜露からの) 保護の仕方のこ

とであるが、これらは点火の仕方や米の炊き方にかかわる技術と違って、その遂行状況が野外炊事の作業全体に直接的な影響を持つものではなく、どちらかといえば緊急時などに対する備えとして意味を持つものではないかと思われる。つまり、点火の仕方や米の炊き方はそれ自体うまく遂行できないと、米の炊事を実際に済ますことはおそらくできないであろうが、上述の薪の扱い方がうまく遂行されなくても、米の炊事がうまくいくことは充分あり得るのである。キャンプでは準備段階の技術の遂行状況が低いことを先にも述べたが、そのうちキャンプ中に何度も同じ作業を繰り返しているにもかかわらず、キャンプ後半の方が遂行状況が低いものがあり、それは技術の特徴からみれば備えにかかわる技術であることが予想される。

また、遂行状況と到達度を比較することによって、遂行状況と到達度のずれが生じている生活技術は何かを明らかにすることができる。また、そのずれがどのようなかによって、生活技術習得の特徴の一端が明らかにされると思われる。例えば、マッチの扱い方にかかわる生活技術のように、遂行状況は高いが、その到達度はそれほど高くないような技術の場合、その技術遂行は必ずしも良いとはいえないこと、あるいは指導者側で設定された目標値が高すぎるものが考えられる。今回の検討ではそのどちらかであるかは判断できないが、どちらにしても、キャンプ・プログラムを設定するときどの生活技術遂行に援助・指導のウエイトを置くかなど、各生活技術の遂行状況にそくして設定する必要があるように思われる。キャンプ・プログラムの検討に関してはすでに述べたが、同時にこのような点についても考

慮する必要があると考えられる。

5. 結論および今後の課題

本論文は、生活技術の種類別にみた場合、遂行状況はどのようになっているのかを明らかにしようとするものであった。分析結果を考察してみると、1)キャンプ全体ではとくに野外炊事にかかわる一連の作業の最初の方に用いられるような準備段階の技術の遂行状況が低いこと、2)上述の準備段階の技術については、薪の扱い方にかかわる技術はキャンプ後半の方が低いことが考えられる。

今後の課題としては、まず第1に、青少年の野外教育における生活技術習得の特徴を明らかにするという問題解明のための生活技術習得枠組の有効性の検討を行うことである。有効性の検討にあたっては、たとえ事例研究であっても、この枠組で生活技術習得の特徴として何か予想できる事実があるかどうかを検討する必要があるだろうが、その際、表-7.の枠組とのかかわりで検討しなければならないと思われる。今回取り上げた野外炊事にかかわる生活技術は、表-7.の枠組からみれば、生物的機能維持の領域にかかわる技術の一つである。これについては、生物的機能維持の領域の他のもの（例えば、衣類や住居など）や、あるいは他領域（例えば、財・サービスの生

表-7. 青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組
—生活の領域別にみた野外教育プログラムでの生活技術習得活動—

生活の領域		野外教育プログラム	野外教育プログラム①	野外教育プログラム②	野外教育プログラム③
生物的機能維持の領域	衣食住に関する日常的な物質的満足				
	睡眠や排泄など生物的動因の解決				
	健康の維持				
財・サービスの生産・分配の領域					
新成員の社会化の領域					
秩序の維持の領域					

※生活への意味付け・動機付けの領域は、表中の各領域の点線から下の部分に位置付けられる。

産・分配の領域など)のものについても調べることによって、今回の研究結果が、生活のすべての領域で共通していえることなのか、あるいはある特定の領域のみにおいていえることなのか明らかになるとと思われる。今後は、枠組そのものの検討を行うと同時に、その点について解明していく必要もあろう。

第2の課題は、遂行状況やその到達度に影響を与えると思われるさまざまな要因について検討することである。野外炊事に限らず班で行う活動にあってはキャンプカウンセラーがどのようにかかわるかが重要になってくると思われるが、そのような生活技術遂行における指導者の援助の影響なども検討しなければならないであろう。

第3に、どの種類の生活技術がどのくらい遂行することが難しいのかというような生活技術遂行の難易度、生活技術の遂行過程などの検討が挙げられる。

第4としては、観察上の課題もあるであろう。本論文で取り上げた観察は、8または9人で構成された男女学年混合の班全体の生活技術の遂行状況の観察であった。各班では被観察者であるキャンプ参加者が作業を分担して行ったこともあり、すべての参加者が各生活技術を遂行していないので、今回の生活技術

の遂行状況は個人レベルのそれではなかった。また、参加者間には年齢や性、キャンプ経験などの違いがあるので、どの参加者がどの作業を行ったかによって、各種生活技術の遂行に大きな影響を及ぼすことが考えられる。これらについての検討も今後の課題である。

注および引用文献

- 1) 野外教育に参加する青少年の意識的側面に関する効果については、これまでに、自己概念や自然認識の変容などの点で検討されてきている(井村仁(1982):アドベンチャー・プログラム経験が中高生の自己概念と不安に及ぼす影響、筑波大学体育科学系紀要、筑波大学体育科学系、5、59-70。橘直隆・小畠哲・寄金義紀・飯田稔・吉田章・井村仁(1991):フロンティア・アドベンチャー経験が小中学生の自己概念と自然認識に及ぼす影響—静岡県主催事業を事例として—、筑波大学運動学研究、筑波大学体育科学系運動学、7、61-68などを参照)。また生活技術習得にかかわる効果については、キャンプクラフトを中心とした野外生活技術の習得が検討されている(馬場進一郎・小泉紀雄・川畑智子・高田良平(1988):キャンプ実習における学習内容の相違が実

習生の野外生活技術の修得に及ぼす影響についての一考察—昭和62年度日本体育大学キャンプ実習を事例として—、日本体育大学紀要、17-2、143-153)。

2) 第15期中央教育審議会第一次答申(1996):21世紀を展望した我が国の教育の在り方について、中央教育審議会、第1部(3)。

3) 白木賢信(1998):

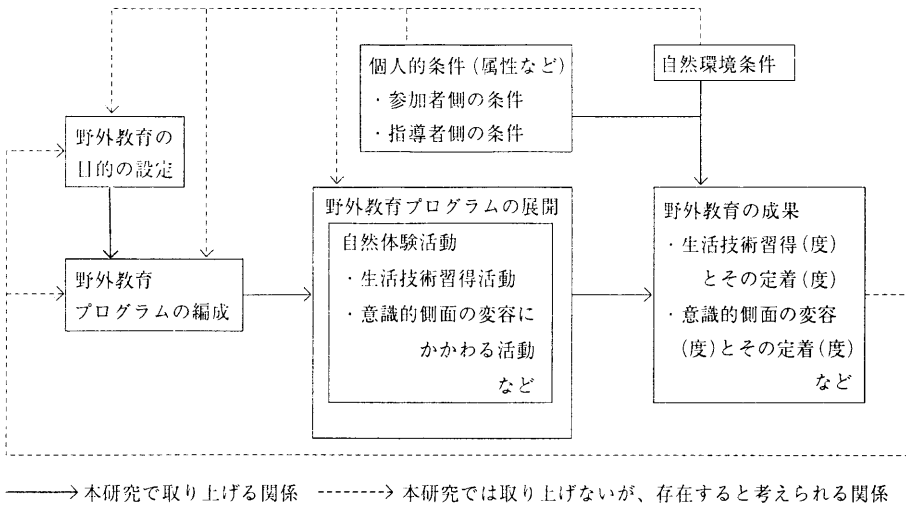


図-2. 青少年の野外教育における分析枠組

生活技術習得の観点による青少年の野外教育プログラムの分析方法、日本野外教育学会第1回大会研究発表資料を参照。なお、青少年の野外教育について図-2のような分析枠組を考えると、(1)の枠組は図中の「野外教育プログラムの展開」の「自然体験活動」の一つである「生活技術習得活動」を分析対象とするものであり、(2)の枠組はその右の「野外教育の成果」の一つである「生活技術習得(度)」を分析対象とするものである。

- 4) 白木賢信(1998): 青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組、日本生涯教育学会論集、日本生涯教育学会、19、57-66。なお、分析枠組は表-7である。この表について、表側にある生活の領域は、社会生活に必要な機能的条件という観点からとらえた領域である。具体的には、①生物的機能維持の領域(生物的 biologic 機能を維持するために必要なもので、衣食住に関する日常的な物質的満足、睡眠や排泄など生物的な動因の解決、健康の維持など)、②財・サービスの生産・分配の領域(広い意味で経済的 economic と呼ばれるような、生存に最低限必要な衣食住以上の物質的財やサービスに結び付く活動など)、③成員の再生産の領域(成員の補充に関するもので、出産、移住、養子縁組など)、④新成員の社会化の領域(子どもに対する価値観・知識・技術の提供に関するもので、教育、養育など)、⑤秩序の維持の領域(秩序を維持するための統制・調整に関するもので、法律、政治などの領域での活動)、⑥生活への意味付け・動機付けの領域(上述の①~⑤の領域すべてに存在しており、それらの領域での活動をうまく進めたり、その状態を維持したりするもので、娯楽、教養、趣味、祭への参加など)の6領域である(Bennett, John W. & Tumin, Melvin M. (1949): Social Life: Structure and Function、

Alfred A. Knopf, New York、45-59を参照)。ここでは、上述の6領域を並列的に用いていない。⑥の領域は他のいずれかの領域に存在するので、これにかかわる活動は表中の各領域の点線より下に位置付けておくことにしている。さらに、③の領域は、青少年の野外教育では考えられないので削除されている。

- 5) 今回行った研究作業の他に、生活技術の遂行状況をもとに調べた遂行状況の到達度を生活技術の種類別に検討したものや、到達度に影響を及ぼしていると考えられる、生活技術遂行の難易度や生活技術遂行における指導者の援助について検討したものがある(白木賢信(1999): 生活技術習得枠組による青少年の組織キャンプ分析—食事の場合—、日本生涯教育学会論集、日本生涯教育学会、20、133-140、白木賢信(1999): 青少年の組織キャンプにおける生活技術遂行についての検討、日本生涯教育学会第20回大会研究発表資料を参照)。
- 6) 例えば、技術を構成する要素に着目した場合、それは、(1)道具・部品、(2)知識、(3)テクニック・技能・ノウハウ・方法の3種類があり、技術はこの3種類の要素の組合せから成り立っていることになる(小泉賢吉郎(1997): 科学・技術論講義—社会の中の科学・技術を考える—、培風館、東京、107)。そしてこのような技術には、階層性があることも考慮しなければならないであろう。
- 7) 馬場敬治(1970(初版1936)): 技術と社会(第1巻)(馬場敬治著作選集Ⅶ)、酒井書店・育英堂、東京、7-8。
- 8) なお、図中の枠組内の項目については、次の手続きを得ている。
- (1) キャンプに関するテキストの内容を参考に、野外炊事にかかわる生活技術の項目を抽出し、先の生活技術をとらえる枠組に当てはめた(松田稔(1978): ザ・キャン

プーその理論と実際、創元社、大阪、平野吉直（1989）：野外炊事（日本野外教育研究会編：キャンプテキスト、杏林書院、東京、71-77）を参照）。また、観察対象のキャンプの指導者用マニュアルを参考に、項目の用語等の検討を行った。

(2) キャンプ指導経験者2名（共に(社)日本キャンプ協会指導者資格所有）の意見を参考に、項目の修正をした。

9) キャンプ全体を通しての生活技術の遂行状況を検討する際に、1回分の観察データのみを用いると、遂行状況がその観察時における天気などの自然環境条件や偶然性などの影響を受けることがある。ここではその点を少しでも避けるために、2回分の観察データを用いている。

10) 諸澄敏之（1992）：冒険プログラム1（キャンプ場内及びその周辺で行なう活動）（日本野外教育研究会編：キャンププログラム1（野外活動テキストシリーズ4）、杏林書院、東京、64-79）、64-66などを参照。

11) 一般に、任意の定数 p ($0 < p < 1$) に対して、 $100p\%$ 分位点というのは、次のような値 a のことである。測定値を大きさの順に並べる。 a より小さい測定値の割合が $100p\%$ 以下であり、また、 a より大きい測定値の割合も $100(1-p)\%$ 以下のとき、 a を $100p\%$ 分位点という。このうち、 25% 分位点のことを第1四分位点といい、 75% 分位点のことを第3四分位点という。第2四分位点とは、メディアンのこと、 50% 分位点のことである（佐和隆光（1974）：初等統計解析、新曜社、東京、42-43を参照）。

12) 下位群に入る生活技術の一つに、6300（焚火の消火時の）水のかけ方も挙げられているが、現在はかまどの火を消すのに、次の野外炊事のことを考えて水を使用しないことが一般的になってきている。したがって、今後は水を使用しない消火法の遂行状況の方を検討していく必要があるように

思われる。

13) 注9)で述べているように、1回分の観察データのみを用いた検討を行う場合、遂行状況がその観察時における天気などの自然環境条件や前後の活動内容、活動時間などの影響を受けている可能性も考慮する必要がある。ここで、キャンプ全体を通しての生活技術の遂行状況の上位群と下位群に着目したのは、上位群は遂行状況の高いもの、下位群は遂行状況の低いものとして安定しており、上述の可能性はほとんどないと判断したからである。

14) 注5)を参照。

15) 例えば、注1)の馬場他前掲書を参照。

16) 今回の観察では、食事にかかわる作業に要した時間は、2回とも3時間程度であった。